
雲乗りのディーゴ～グランネリア物語～

和奈寛向

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雲乗りのディーゴ〜グランネリア物語〜

【Nコード】

N7337I

【作者名】

和奈寛向

【あらすじ】

「雲乗りのディーゴ〜グランネリア物語〜」を牧歌舎から発売します。（12月予定）

グランネリア大陸を東西に分かつターネイ山系の主峰カルパス山の中腹に、雲乗りの一族が暮らすノークラット村があった。

雲乗りの少年ディーゴはある日の早朝、天に至るような高原の小道を彼の飛び雲と共に登り、雲乗りの男たちの仕事場である雲の泊りに父を尋ねた。

雲の泊の一室で、デイーゴは大人たちの会話から、海洋王国ルドニックに、雲乗りが暴れ雲と呼ぶ嵐が近づいており、村から雲の導士が警告に向かうことを知る。

雲の導士に憧れるデイーゴは少年の心を輝かせるが、村には十六歳に満たない者は導士になれないという掟があった。

デイーゴにとって幸運なことに、雲の導士に選ばれていた村人が事故に合い、デイーゴを愛する村人は、掟に多少目を瞑り、急遽デイーゴを雲の導士に選出した。

村の長老の差配により、雲の導士となる為の儀式を終えたデイーゴは、村人からの祝福を受け、飛び雲の背に乗ってルドニックへと飛び立つ。

かつて父と共に訪れたことがあるルドニック王都アルコープに到着したデイーゴは、宮城で歓待される様を想像し少年の心を弾ませたが、友好的であったはずの王の対応は冷たかった。

六年前の嵐により王妃を亡くしていた王は、自然を畏敬し自然と共に生きる王から、自然を憎み人知の力で自然を凌駕することを望む王へと変貌を遂げていたのだ。

(前書き)

「雲乗りのディーゴ」グランネリア物語」が牧歌舎から発売中です！！

全国書店のほか、Amazon、楽天、紀伊国屋やジュンク堂などのネットからでもお買い求めいただけます。

高き天と広き沃野のグランネリアに、雲乗りの少年ディーゴが飛び立つ！！人は自然の支配者なのか、共存者なのか。人と自然との関わりが問われる今、未来を担う子どもたち達へ、そして未来を残すべき大人たちへ伝えたいファンタジー。

序章

時知れぬ神代に。

天府の大神オーンと冥府の大神デューンは、劫を重ねた戦いの果てに、各々の領域の狭間に新たな世界を創りたもうた。

天星船あめぼしふねから降り立ったオーンの翼の影は大地となり、黄泉境坂よみのさかいさかを登り来たったデューンの翼の影が海原となった。

両の大神は盟約を交わし、狭間の世界への干渉を互いに禁じ、各々の力の原理を分け与えたものを、同じ数だけ降臨させたもうた。

降臨したるものは、狭間の世界の理を、それぞれが授けられた力の領域で司った。

天星船へ昇るオーンの翼が風を起こし、雨を注いで、狭間の世界に草食むものを産み落としたもうた。

黄泉境坂を下るデューンの翼が大地を穿ち、火を噴いて、狭間の世界に肉食むものを産み落としたもうた。

草食むものと肉食むもの、そして司るものは、数万年の時軸の回転の後に交じり合い、幾つもの新たな種を生み出した。

新たな種のうち、最も非力でありながら最も栄えたものは、狭間の世界をグランネリアと名付け、そこに幾つかの国を創った。

国が生まれて、さらに数千年が去り、物語が生まれた。
遙か過去の記憶なのか。

遠き未来の予言なのか。
それさえも定かでない物語は、高き天と広き大地に精霊が息づき、

神々への畏怖が失われていない時代の芽若き言の葉で紡がれる。

ノークラット村

雲が眼下を渡る高原の小道は、大地よりも空が近い。果てもなく広がる青空の下、カルパースの裾野を覆う大森林を切り分けるかのように流れる大河の、その源がこの小道に沿う溪流にあることを、森の鳥獣たちは知っているだろうか。

高き天と広き沃野の大陸グランネリア。そのほぼ中央を東西に分かつターネイ山脈は、至天山カルパースを主峰とする雄大な大地の隆起である。そのカルパースの中腹に、ノークラット村はあった。溪流はカルパースの雪解水を清らかに運んで行く。岩魚が水面に撥ね、早朝の陽光に濡れた鱗を輝かす様子を、デイーゴは丸太橋から眩しげに見た。

高原の小道はうねうねと身をくねらせながらどこまでも登って行く。この道がそのまま天界に通じていると戯れ言を口にしても、知らぬ者はあるいは信じるかもしれない。

そんな道は決して平坦ではないのだが、十五歳のデイーゴはリュックを背負って駆けて行く。尋常な足腰ではないが、ノークラットの村人にとっては、さして驚くべきことではない。

デイーゴの後を、銀白に輝く不思議な物体が子犬のようについてくる。ノークラットの村人以外では知る者は稀であるうが、飛び雲と呼ばれる不思議な命が、ここカルパースには息付いている。

「今日も空があんなに青い。すぐ手の届きそうなところにあるけど、どんなに手を伸ばしても届かないんだ。でも、麓の人から見れば、僕らはきつと空の住人のように見えるんだらうね、パル」

デイーゴは、銀白に輝く飛び雲を振り返り、パルと呼んで話しかけた。パルの体が一瞬銀色に輝いたのは、陽の照らす角度が変わったからかも知れないが、デイーゴの声に応じたのかも知れない。さしずめ、さてどうだらうね、という感じだらう。

飛び雲は、主人と生涯を共にする。雲乗りと呼ばれる人々は、飛び雲の背に乗って、大空が果てぬ限りどこまでも飛び行くことができるのだ。

生物というよりは妖精に近いのだらう。青空を悠々と渡る雲の妖

精だ。研究を深めた者がいないので、雲乗りと飛び雲の関係は解明されていないが、確かなことは、雲乗りが新しい誕生を迎える時、どこから来るのか、その家の屋根の煙突辺りに、一つの小さな銀白の雲が浮かんでいるということだ。そして主人たる雲乗りがこの世を去れば、飛び雲もまた人知れず消えてしまう。あたかも、現世に実態を持たない雲の精霊が、雲乗りの命の誕生を媒介として現れ、命の終焉に伴い隠世に戻るかのようである。

雲乗りの人々は皆、生涯の相棒たる飛び雲を大切にする。特に雲を率いて世界の果てまでへも行く男衆にすれば、飛び雲は騎士にとつての駿馬のような存在であった。

「サラン王国の王都ティアマティアの金色獅子城、ダルツェン帝国の帝都ジュカールの青鋼五頭龍城、ミストア教皇国の皇都クリプソンヘルンの白鷲大聖堂。いずれ全ての都市や町にその名を残す大雲乗りになるんだ。な、パル」

デイーゴは自分の飛び雲をパルノードと名付けた。ノークラットの言葉で、疾風を狩る者を意味する。大空を瞬時に渡る疾風雲を狩ることができるほど速い飛び雲というわけだ。

デイーゴとパルノードは一歩一歩空の高みへ近づいて行く。

カルパースの中腹ともなれば、木洩れ日の回廊となる背の高い樹木は育たないが、代わりに色とりどりの高山植物が、小さい可憐な花卉で小道の縁を彩っている。黄や青の花弁の合間を蜂や蝶が花蜜を求めて飛び交い、高山植物達の生命の連鎖に一役買っている。

小道は尾根へ抜けた。空が一段と近くなる。風がゆっくりと、尾根を労わるように渡り、山かつらが尾根を這う。

尾根は遙かカルパースの頂へと続いており、その途中で、煉瓦造りの建物が白い煙を吐いている。

煉瓦造りの建物は恐ろしくも断崖の間際に建っており、青い虚空へと栈橋を伸ばしている。そして栈橋の向こうには数知れない雲が浮かんでいた。ノークラットの村人が『雲の泊』と呼ぶ、雲乗りの男たちの仕事場だ。

小道は、その雲の泊の木扉に続いていた。

群から外れたのか、小道を小さな白雲が一片、よたよたとデイーゴの先に行く。その白雲から突然耳が生えたから、デイーゴは驚いた。茶色い毛に覆われた小さな耳はびくびくと動き、やがて白雲から飛び出した姿を見ると、高地に棲むキツネの子供だった。キツネの子が駆けて行く先には母キツネが待っていて、じゃれつく我が子をいとおしみつつ、デイーゴをちらりと見た。

母キツネに警戒している様子はない。母キツネは、デイーゴが子キツネを狙う敵ではないことを知っている。むしろ、デイーゴたち雲乗りの一族を、カルパースの守人であると信じているような安堵の表情を見せている。

母子のキツネは、やがて尾根の向こうへ姿を消した。デイーゴは手を振って見送った。さて、いよいよ目的地は目前だ。

「ここで待つているんだよ」

煉瓦造りの建物の前で、デイーゴはパルノードにそう言った。パルノードはふるふる小さく体を震わせた。了解という合図だ。

「おはよう」

雲の泊の木扉を開けると、喧噪が出迎えた。小道の道中があまりに静かだったためか、この出迎えは、勝手知ったることとはいえ、少々面食らう。静々しいチェロの調べに蕩々とする耳に、いきなりシンバルを食らわされたような衝撃だ。

煉瓦造りの建物は、雲の泊の事務所だったのだ。ここではノークラット村の男衆が何人も働いている。書類を運ぶ男の木靴の音。怒声に乗った指示。紙面に走るペンの音。ストーブの上のヤカンが蒸気の口笛を吹き上げる音。いろんな音が三重奏とも四重奏ともなつて、まだ成長途中のデイーゴの小さな体では、危うく押し流されそうになる。

デイーゴの訪問に、大人達は誰一人気が付かない。そのことに頬を膨らませたデイーゴは、身体一杯に空気を吸い込むと、大声に乗せて一気に吐き出した。

「お・は・よ・う！」

ようやく大人達は、入り口の少年に気が付いた。

「ディーゴじゃないか」

「また夢休ゆめきゅうのパイの相伴にあずかるうというのか。それにしちゃ、ちよつと時間が早すぎるな」

茶色い鞆を持って正装した若い大人が、からかい口調に言った。

夢休とは、夢通しの休息のことである。昼食後一働きしてからの時間帯を、神も転寝する時間とし、貴い神の夢を破らぬよう、ノークラットの男衆は一休みするのである。

男衆が、もちろんディーゴも含めて、その時間を楽しみにしているのは、その時にノークラットの女達が手作りのパイを差し入れるからだ。働く男衆に対して、女衆が尊敬と感謝の気持ちを贈る、昔からの習わしだ。特に、野苺に似たチョコの実のパイは、その甘酸っぱさが絶妙で、男衆に絶大な人気を博していた。パイの味の善し悪しは妻の愛の多寡によるとされ、夢通しの休息は、男衆の業界用語では『妻の愛を探知する時間』とも言われている。

ちなみに、男衆から女衆に贈るものは、夢前ゆめさきの紅茶という。家庭を一日守った女衆に対して、尊敬と感謝の気持ちを込めて、一杯の紅茶を淹れるのだ。この夢前の紅茶にはそれぞれの家庭の味があり、年に一度、味を競う大会もある。ノークラットの古き良き伝統である。なお、女衆の業界用語では『浮気の後ろめたさを探知する紅茶』とも言われている。

「そうじゃないよ」

ディーゴは首を振った。確かに、これまで何度か偶然を装って頃合いの時間に遊びにきては、夢休のパイの相伴にあずかったことはある。だが、今日はそれが目的ではない。

「ははは、そうかい。ま、俺もこれから出張でな。しばらくチョコの実のパイは食べられそうもないんだ。仕事に出る俺が食べられなくて、お前さんが食べるのは癪だと思ったが、お前さんの目的がそれじゃなくて安心したよ」

彼はそう言つて肩越しに手を振ると、鼻歌交じりに歩き去つた。

「おい、デীগーゴ」

次の大人は、太つた中年の大人だ。

「また仕事の手伝いがしたいって言つんじやないだらうな。あの時は後処理が大変だつたんだ。子供は子供らしく、村で駆けっこでもしているよ」

懸命に背伸びして大人ぶろうとするデীগーゴを、本当はいとおしく思っているくせに、大人達はわざと意地悪く言つのだつた。

一月ほど前のことだが、確かにあの時は、雨雲を日照りで困っている麓の村にまで引率するはずが、誤つてカルパース山の反対の麓の村に引率して大雨を降らせてしまつたという失態を犯した。それがまた水樽の底を抜いたような大雨だつたから、大人達は仰天して後処理に当たつたのだつた。

「違つよお」

デীগーゴは唇を尖らせて不平を主張した。パイをねだつたり、仕事の邪魔をしたり、指摘されると耳の痛いことではあるが、大人達はまったく僕を食いしん坊か、おつちよこちよいのどちらかだと思つているのかしら、とデীগーゴは頭から二三度湯気を噴いた。

「ははは、そうかい。それは助かつた」

太つた中年の大人は安堵の笑みを浮かべつつ歩き去つた。

「僕は、今に村一番の雲乗りになつてみせるんだからな」

心の中で誓いを新たにするデীগーゴであつたが、差し当たり今は母親から与えられた任務を全うしなければならぬ。石畳を木靴で鳴らしながら、デীগーゴは事務所の中を進んだ。正面に、古い黒机の上で、天辺から白い煙を吐く書類の山が現れた。

「じいさん、パルモじいさん」

デীগーゴがそう呼んで、黒机の隅を指でコンコンと突つくと、書類の山が二つに割れ、間から白髪白髭の老人の顔が覗いた。机と同じ色のパイプを咥え、工場の煙突のような煙を吐いている。

「おや、ジュードのところの倅かね。何か用かね？」

パルモ爺さんは、眩しいものを見た時のように目を細めた。爺さんは、村の子供たち全員を愛していた。と同時に、村の子供たち全員から慕われていた。パルモ爺さんは熟練の雲乗りで、雲の泊の事務所を一手に切り盛りしている。村の長老からの信頼は厚く、若手から壮年までの雲乗り全てから受ける信望は豊かである。ディーゴが将来の目標とする二番目の雲乗りだ。

「父さんに、お弁当を持ってきたんだ」

ディーゴはそう言って、書類の谷間に弁当箱を置いた。

「ほ、倅がこんなに大きくなって、まだ忘れ物癖が直らぬらしい」
パルモ爺さんは椅子を軋ませて笑った。

「確か空見そらみの部屋におるはずじゃ。どれ、わしも行こう」

椅子から体を起こしたパルモ爺さんは、

「大きくなつたな、ディーゴ」

と、ディーゴの頭に手を置いた。七十歳に近いとは思えぬ力強い手だ。

「タベも同じことを言ったよ」

「ほ、そうかの？」

「うん」

「この歳になると、物覚えが悪くなるからのう」

「どうして？」

「うむ？まあそうじゃなあ、同じ一日でも、お前さんの一日とわしの一日とでは長さが違うからのう。若い頃の一日は一瞬でも、わしの一日は長いのじゃ。だから、その間に忘れてしまふ。のうディーゴよ、だからこそ若い頃にたくさん勉強せねばならぬのじゃ。老いてからの長い一日を、後悔だけに費やさぬようにのう」

「うん。少年老い易く、光陰は矢のごとしだね」

「おお、そうじゃ。良く知っておるのう」

「昨日学校で習ったんだ」

「そうか、そうか。ディーゴは先生の話をよく聞いておるのう。感心じゃ」

パルモ爺さんに褒められて、ディーゴは鼻を押さえていなければ天井に支えそうなほどに、うれしくなった。と、空見の部屋の木扉の前まで来た。

空見の部屋の木扉を開け、中に入ると、異空間に足を踏み入れたのではと疑うほど、部屋内には静寂が満ちていた。木扉を閉める音だけが、唯一の音源であるかのようだ。だが、耳を澄すと、もう一つ、微かだが確かに部屋の静まった空気を震わす音源があることに気づく。それは部屋の中央やや奥に有り、淡く黄金色の光を発している。光の輝きは強くなったかと思えば弱くなり、かと思えば再び強くなった。その光の強弱に合わせて、微かな音律が発せられている。

その黄金色の光の中に、三人の大人が首を突っ込んでいる。その左端の雲乗りがジュード。ディーゴが将来の目標とする一番目の雲乗りであり、彼の父親であった。

ジュードは淡い光の中でちらりとディーゴを見ると、

「ここには遊びに来てはいかんと言っただろう」

と、軽く叱った。ディーゴは頬を膨らませて応戦した。

「父さんの忘れ物を届けに来たんじゃないか」

そう言っつて、手に持っていたジュードの弁当箱を、顔の高さに掲げてみせた。この父子の応酬には、息子に分があった。ジュードは淡い黄金色の光の中から顔を出して、

「そうか。すまん、ありがとう」

と、表情を和らげた。

「そこいらに置いておいてくれ」

ジュードの顔は、その一言を残して再び光の中に差し込まれた。パルモ爺さんが、光の側に歩み寄った。

「どうだね？」

と、パルモ爺さんが尋ねると、

「あまりよろしくないですね」

と、ジュードが答えた。パルモ爺さんも淡い黄金色の光の中に白

髭一杯の顔を差し込んで、何か小言でジュードたちと話した。

傍らの、地図やら本やらが整列している棚に弁当の包みを置いた
デイーゴは、樹液の甘い香りに興味をそられた昆虫のように、ジ
ュードやパルモ爺さんたちが難しい顔を差し込む淡い光の方へ吸い
寄せられていった。

彼が母親から与えられた任務は既に遂行済であったが、子供と大
人の中間に差しかかったデイーゴの、若い果実のような自尊心が、
このまま単に子供の使いに終わることを許さなかった。あの淡い光
の中に大人達と同じように難しい顔を並べること、子供と大人の
境界線を越えることができるように思えた。

「すごいや」

最初にデイーゴの瞳が大きく見開かれ、驚きの声が続いた。
淡い黄金色の光の中に、空があった。空には、雲たちが生き生き
と流れており、雲たちの黒い足跡は、長い山脈の山肌に落とされて
行く。

「これはカルパスだね」

デイーゴの驚きは、声となって唇から飛び出した。

空と大地の一部を切り取って、目に見えない巨人が力一杯に握っ
て固く小さく凝固させたような不思議な映像が映し出されている。

「わしらはな、この天球晶の導きで、必要な雲を、必要な地に運ん
でおるのじゃよ」

デイーゴの肩を軽く叩いたパルモ爺さんは、そう言った。

この部屋が、空見の部屋と呼ばれるその所以を、デイーゴは知る
ことができた。パルモ爺さんが天球晶と呼んだ黄金色の光を発する
その水晶は、雲乗りの一族に天性備わっている不思議な力と感知し
あつて、世界の果てから果ての空の様子を教えてくれるのだ。空だ
けではなく、その下に広がる広大な大陸の様子も、あたかも羽ばた
き一つで万里を飛翔する鳳凰の瞳を得たかのように見ることができ
る。と言って、雲乗りであれば、誰でもがその天球晶の恵みを思う
がままに享受できるのではない。デイーゴのような半人前であれば、

せいぜいこの雲の泊の周辺が見えるに過ぎない。万里の彼方を知ろうとすれば、類い稀な才能と積み重ねられた鍛練が必要だ。また、例え万里の彼方を見通すことができる者であっても、その空に生ずる全ての事象を見通す事ができる者は、さらに稀な存在であった。

稀の中に稀を求めねばならない『神の眼』を持つ雲乗りは、ここ数百年現れていない。

「さて、右の瞳に好奇心、左の瞳に探求心を灯らせる末頼もしき少年の父親の、眉を曇らせるその訳を聞かせてもらえるかね」

と、パルモ爺さんは顔をジュードに向けて、白髭をすごいた。

「ご覧ください」

ジュードは、天球晶のある一点を指さした。そこは、ディーゴの眼には見えないどこか遠くの空であるようだ。

「ここに天霊の乱れが生じており、周囲の不属霊を巻き込みつつあります。今はまだ南の海上にあります。数日中にはルドニック王国に上陸するでしょう」

ジュードの言葉を脇で聞くディーゴは、持てる知識の全てに集合命令をかけて、解読に挑んだ。

天霊とは、天という概念に属する精霊の総称である。精霊とは森羅万象の発生の源となる無意識なる存在であり、風霊、雨霊、雷霊などがそれである。これら無意識なる存在はしばしば衝突し合い、天空に乱れを生じさせる。その乱れが、周囲の不属霊（それはどのような概念にも属さない数多の精霊であるが）を巻き込んで成長する時、雲乗りの言葉で言う暴れ雲を発生させる。その暴れ雲が、ルドニックというグランネリア大陸中央部南海に浮かぶ諸島国家に近付きつつある、というのがディーゴの理解であり、それはまず正解であった。

パルモ爺さんは、長い髭をすごきながら、

「ふむ。確かに憂慮すべき事態じゃが、手を拱いておるわけではあるまい」

と、言った。

「無論です。すでにエリオを警告に向かわせました」と、ジュードは答えた。

エリオは、デイーゴが雲の泊の事務所に入ってきたときに最初にすれ違った、茶色い鞆を持った青年の雲乗りだ。明朗な性格で、誰からも好かれる雲乗りだったが、かなりおつちよこちよいなところがあると、デイーゴは夕飯の食卓で、母と父の会話から聞いたことがある。そのことを納得する時間が近づきつつあった。

「ならば案ずることはあるまい。ルドニツクのロイデン王はご賢明な方じゃ。我らの警告を真摯に受け止め、必要な対策を迅速に措置なさるじやろっ」

パルモ爺さんが楽観の笑い声を立てようとするよりも早く、その騒動はやって来た。

空見の部屋の外が騒がしい。木扉の向こうを駆け回っている騒動は緊迫感を含んでおり、その騒動が、何か良くないことによって生じたであろう事は、デイーゴにも容易に想像できた。

「やれやれ。危険はルドニツクよりもこちらが先だったようじゃな」
パルモ爺さんは、デイーゴに肩をすくめて見せた。

「どうしたんだ」

ジュードは木扉を開けて、最初に目の合った男に尋ねた。

「誰かは分らんが、誤って棧橋から落ちたらしい」

ジュードの顔色が青くなった。雲の泊の棧橋を踏み外せば、下にはどれほどの深さかも知れぬ虚空があるだけである。大地から見上げれば爽快な空の青も、一度飲み込まれば死の暗黒へと変わる。

しかし、神の恩恵が施されたのか、事件は悲話にはならず、数時間後には笑い話となって、村の女達のお喋りのネタにされることになる。

たまたま仕事を終えて雲の泊の棧橋に着こうとしていた別の雲乗りが、瞬時に飛び雲を操って、虚空の大口に飲み込まれそうになる雲乗りを、すんでのところで救い上げた。本人にも危険の及ぶ垂直降下を敢行したこの雲乗りの勇気は、彼の生涯を通じて称賛される

ことになる。

事件の詳細が分かるにつれて、事務所内の空気が明るくなるのは反比例に、ジュードの顔色は苦々しく歪んだ。

棧橋から足を踏み外した雲乗りらしからぬ男はエリオ。棧橋を渡りつつ、背後の小道を歩く村の若い女達に手を振っていたところ、誤って踏み外したというのだ。エリオらしいといえはその通りだが、彼に重要な任務を与えたジュードには笑い話で済まされなかった。

ジュードは、ルドニツクへの使者にエリオを任じていたのだ。エリオは命こそ落とさずに済んだが、落下直後に崖の岩肌に両足を強く打っているらしく、飛び雲を操ってルドニツクまで飛ぶことは、とても無理であった。ロイデン王宛のノークラット村長名の書簡が入った鞆を落とさなかっただけ良しとしなければならぬ。

「やれやれ。大事には至らなんだが、ルドニツクへの使者を選び直さねばなるまい」

パルモ爺さんに水を向けられたジュードは、ため息を吐いて両肩をすばめた。

「それが、もう手の空いている者がいないのです」

そうでなければわざわざエリオを使者に選びはしない、というジュードの心の声が聞こえたように思うのは、いささかエリオには失礼じゃろうかな、とパルモ爺さんは思った。

ここしばらくは、大陸各地の降雨量が乏しい。作物が育たず、旱魃のおそれのある集落がいくつもある。そのため、ノークラットの雲乗り達は雨雲を率いて各地に飛んでいる。人手が足りず、ジュードはそろそろ猫にでも頼もうかと算段をし始めていたところだった。「さて、どうしたものかのう」

髭をしごきつつ、天井のどこを求めでもなく見上げたパルモ爺さんは、ふと、熱い視線が自分に注がれているのを感じた。その視線を辿って行くと、二つの輝く瞳にぶつかった。髭は白くなっても冒険心を忘れないパルモ爺さんには、脳裏にきらめくものがあつた。「デーゴよ。お前は今、いくつになつたのじゃったかな？」

問われたデイーゴは、少し頓知を働かさなければならなかった。

「十六歳の四カ月前だよ」

と、多少奇異な答え方をしたのは訳がある。ノークラットの掟では、雲乗りの仕事には十六歳から就けることになっている。十五歳では駄目なのだ。

「ほう、十六歳の四カ月前とな」

デイーゴを見るパルモ爺さんの瞳には愛情が灯っている。目の前の、好奇心と、冒険心と、向上心に瞳を輝かせる十六歳の四カ月前の少年は、懸命に背伸びをしている。溢れんばかりの探求心で小さな胸を満たし、一日でも早く村の一員として役に立ちたいと望んでいる。社会から隠れ、親の庇護の下で無為な日々を送るどこかの世界の若者に見習わせたいものだ。

デイーゴの、羨望にも似た思いに至らぬほど、パルモ爺さんの頭脳は老朽化していない。

「やってみるかね、デイーゴ君」

デイーゴの顔が、春の花が咲いたように明るくなった。

「うん」

デイーゴは、まるで春の野原に舞い降りた小鳥のように声を弾ませた。今朝起きた時から、今日は何か良いことがありそうな予感がしていたのだ。

若者の意気に感ずる老雲乗りと、見果てぬ冒険の扉を開きかけた少年雲乗りととの間に、麗しく微笑ましい合意が成り立つとした時、それに異論を差し挟もうとする無粋者がいた。それは外ならぬデイーゴの父、ジュードである。

「ちょっとお待ちください。デイーゴはまだ十六歳にはなっていないのです。雲乗りの仕事をさせるには早すぎます」

父親として息子の一日も早い成長を願うのは当然であったが、ここは雲の泊の實務責任者として、老人と少年のお伽話のような合意成立を見過ごす訳にはいかなかった。それ以上に、息子を愛するがゆえに、初仕事はこんな突発的なものではなく、十分に支度を整え

て、皆の祝福を受けて送り出すものにしてやりたかった。

「父上はあのように申されておるが、どうするか」

パルモ爺さんにそう言われたが、どうするもこうするも、デイーゴとしてはこの機会を逃すつもりはない。

「父さん、やらせてよ。十六歳にはまだなっていないけど、たった四カ月足りないだけさ。僕、きつと大丈夫だよ。それに、ルドニックには行ったこともあるんだ」

息子は父親に詰め寄った。確かに七年前、デイーゴは、今回と同じように天候の悪化を警告する任を受けた父ジュードに、長期戦の駄々をこねて連れて行ってもらった経験がある。

「お願いだよ、父さん」

「いや、駄目だ」

ジュードは首を振った。

「たとえ四カ月が四日だろうとも、足らぬものは足らぬ」

父親が息子の我がままを突っぱねようとした時、おおそくだ、とパルモ爺さんが手を叩いた。脳裏に何かがひらめいたらしい。

「思い出したぞ。確か二十年ほど前にも、今のデイーゴのように、早く仕事をさせるとせがんだ子供がおったぞ。その時は、確か十六歳に六カ月足らなんだはずじゃったが、わしはその子の熱意に負けてな、ついつい許してしもうた。その子は、その後立派な雲乗りになったはずじゃが、さて名前は何と言ったかのう」

言葉はその子の名の失念を装っていたが、目尻の緩んだその瞳は、完全に思い出していることを物語っている。と言うよりも、パルモ爺さんはこの話題の最初から、二十年前のその子の姿を今のデイーゴの姿に重ねていたに違いなく、惚けて見せたのは、子供っぽい悪戯心がそうさせたのだ。

「さてさて、名は何と言ったかのう」

ジュードは観念したらしい。

「二度も言っていただく必要はありません。確かにそれは私です」
ジュードは両肩をすぼめた。パルモ爺さんは恰幅の良い腹を揺ら

して大笑いし、デイーゴは驚いた。

「ええつ。父さんも」

目を丸くする息子の肩を叩いて、

「まあ、そういうことだ。そんな目で見るなよ。俺にだって無鉄砲な頃はあったのさ。今日はつくづく、お前は俺の息子なんだなと思いつたよ」

ジュードは恥ずかしそうに笑った。

「だが、仕事を任される以上失敗は許されないぞ。これは誰かの仕事を手伝うんじゃない。お前自身の仕事になるんだ。その責任を負う覚悟はあるのか」

厳しい言葉は照れ隠しではない。ジュードの顔色に父親の色が浮かんだのは一瞬で、今はもう現場を仕切る仕事人の顔付きに戻っている。

「うん。僕に任せて良かったと父さんに思わせてみせるよ」

デイーゴは微塵の気後れも見せずにそう言った。

「調子のいいことを言うな。半人前のくせに」

ジュードは息子の顔を優しく小突いた。それは承諾の合図でもあった。

「あまり厳しいことを言うてやるな。それほど気張る仕事でもあるまい。ルドニツクのロイデン王の人は、お主も知っているよ」

パルモ爺さんの言うとおり、ロイデン王の人はジュードも良く知っている。威あつて猛からず、善を聞く耳を持ち、過ちを認める勇気を持つ。それがジュードの人物帳に載せられたロイデン王の印象であった。

「父さん、本当に僕がやつてもいいんだね」

息子のきらきら輝く眼差しに、ジュードは頷いた。

「だが、母さんの許しを得られれば、だぞ」

足に紐でも付けておかなければ、どこまで舞い上がるか知れない息子の小躍りする姿に、ジュードは最後の抵抗を試みた。

「ノークラット随一の雲乗りよりも、奥方の権威が強いようじゃな」
ほっほ、ほっほと、パルモ爺さんは笑った。

「パルモ爺さん」

「ほほ、怒るでない。怒るでない。奥方を立てておけば家庭は丸く収まるということじゃ。わしも家の婆には頭が上がりらん」

パルモ爺さんはそう言つて、片目を瞑つた。そして一つ柏手を打つて、

「さて少年。かくてお前の冒険を妨げる試練は唯一つとなりぬ。足に翼を。心に希望を。扉は開かれんことを待つておるぞ」

そう言つてディーゴの背中をぽんと叩いた。

「うん」

ディーゴは勢い良く応えた。

「おっと。一つ忘れておつたが、ノークラットの村人が最初の仕事に取り組むには、長老と村の守り神の祝福を受けねばならぬ。長老にはわしが話をしておくゆえ、お前は母君の許しを得れば、長老の屋敷に向かうのじゃ。良いな」

「了解」

ディーゴは、大人の雲乗りたちが仕事中にするように、右手を右耳に沿えて真つすぐに立てる了解の手信号を試してみせた。見よう見まねで覚えたものだが、これからは堂々と使うことができるのだ。

「よし。ならば行くが良い」

パルモ爺さんは、もう一度ディーゴの背中をぽんと叩いた。

雲の泊の事務所扉へ向かうまでの間に、ディーゴは多くの雲乗りたちから祝福を受けた。肩や頭を叩く荒々しい祝福もあったが、ディーゴにはその全てが嬉しかった。

「こんな目出度いことがあるとは、エリオも怪我のし甲斐があったというものだ」

「これでエリオも浮かばれよう」

「おいおい、エリオはまだ生きてるぞ。寝台の上で半べそをかいてるだけさ」

男たちはそう言つて賑やかに笑つた。

エリオのことが少し気の毒になつたデイーゴは、この仕事が終わつたらその報告を、まず長老とパルモ爺さんに、次に父母にした後、三番目に伝えてあげようと思つた。

「父さん、ありがとう」

扉の取っ手を握つたデイーゴは、開ける前に振り返つて、もう一度、父へ礼を言つた。

「礼は、無事に仕事をやり遂げてからにしる」

そのつれない言葉がジュードの照れ隠しであることは誰の目にも明らかで、右隣りの男が、ジュードの肩を叩いて笑つた。

「パル、おいで」

デイーゴは駆け出していた。尾根沿いの山道をゆっくり下る気にはなれなかつた。胸が弾んで、この高なりを母の懐に飛び込んで伝えたかつた。

すつと、パルノードは、駆けるデイーゴの前へ出た。その背に、デイーゴは一跳躍で飛び乗つた。デイーゴは風よりも早くなつた。

主人を背に載せた飛び雲は、一旦高く上昇し、尾根沿いの山道を逸れて、急勾配を一気に降下した。

眼下に小さかつたノークラット村の家々の薨が、見る間に目の前に迫つて来る。村で雑貨屋を営むゴリオーの家の屋根の風見鶏をかすめて、パルノードは水平飛行に移つた。激しい左旋回を強いられた風見鶏が、ようやく回転も落ち着いて文句を言おうとしたときには、犯人は十何軒先の風見鶏を新たな犠牲者としていた。

「あれっ」

屋上で洗濯物を干していたクラースク夫人が、突如現れた洗濯泥棒に驚いて、尻餅を付いた。

「こら、デイーゴ。悪戯ばかりして」

クラースク夫人の叱声は、残念ながらデイーゴの影を掴むこともできなかつた。目測を誤つて干された洗濯物の列に飛び込んだパルノードは、主人の顔に白いタオルを巻き付けながら、なお滑空して

いく。

「ごめんなさい。このタオルは後で洗濯して返すから」

陳謝の言葉は、もはや景色の中の一点となったクラースク夫人に果たして届いたかどうか。

「おいおいパル、調子に乗りすぎだよ。僕らの家も飛び越して、何処まで飛んでいこうって言うんだ」

このまま放っておけばサラン王国の首都ティアマティアまで飛んでいきそうな相棒に、ディーゴは言葉の手綱を引いた。パルノードは、一度高く上昇したかと思うと、緩やかに旋回しながら、家の一階の窓を覗ける高さにまで降下した。ディーゴは、ちょうど自分の家の玄関先で、パルノードの背から飛び降りた。

「母さん」

勢い良く入ってきたディーゴは、小さな台風だ。

「大変だよ、大変なんだよ、母さん」

喜びの音律を多分に含んだ息子の声から緊急事態を想定せずに済んだ母は、慌てず台所作業を続けていた。

「母さん、大変なんだってば」

台所に駆け込んだディーゴは、焦れつたそうに食卓の上をたんと叩いた。

「そんな大はしゃぎな大変なんてありませんよ」

母テムナは、ディーゴの大好きな優しい微笑みを浮かべながら、息子の足元を見て、続けて息子の肩越しに玄関へ至る廊下を覗いた。「靴の泥を落とさずに入ってきたのね。大変なのは私の方だわ。今日二度目の廊下掃除をしなければならぬんですもの」

「ごめんなさい、母さん。廊下は後で僕が掃除しておくよ」

「よろしい。では、許して上げましょう」

テムナは品の良い眉を心持ち上げて、息子の謝罪を受け入れた。

「でも大変なんだよ」

テムナは吹き出して笑った。

「大変大変って、大変さんも大変ね。どうしたの」

「あのね、今日エリオが怪我しちゃってね、でもルドニックに誰が行かなくちゃいけないくてね、ロイデン王は僕も知ってるしね、僕はまだ十六にはなっていないけどね、パルモ爺さんが行ってみるかって言ってくれてね、父さんも実はずっと昔に十六歳になるまでにパルモ爺さんにせがんだことがあってね、僕、母さんの許可が貰えたら、雲乗りの仕事をする事ができるんだ」

「ちよつと、ちよつと、待って」

テムナは、息子の幼い口元から次々と発せられる言葉の洪水に、一旦降参した。

「そんなに一度に話されると分からないわ。さ、そこにお掛けなさい。ちよつとお茶を淹れようと思っていたところ。お茶を飲みながら、順序立ててゆっくりと話しなさいな」

ディーゴは出足を挫かれた思いで唇を尖らせたが、母に促されるままに椅子に腰掛け、木をくりぬいたカップを前にした。しばらくすると、母の手によって、香ばしい香りのする飲み物が、白い湯気をたゆたわせつつ注がれた。

テムナは一口含んで、

「それで、何が大変なの」

と、息子を促した。ディーゴも一口飲んでから、父に無事お弁当を届けたこと、ルドニック王国の近海で天霊の乱れが生じており暴れ雲の発生が懸念されるためロイデン王に警告しなければならぬこと、その使者になるはずだったエリオが村の若い女性に見取れて雲の泊の棧橋から落ち、命に別条はないものの職務を遂行できない怪我を負ったこと、エリオに替わって、ディーゴが使者として選ばれたこと、母親の許可を得れば、すぐにも長老屋敷で祝福の儀式が執り行われることなどを話した。

話の始めに微笑していたテムナは、エリオが若い女性に見取れて怪我をした段になると、エリオらしいと吹き出したが、話が佳境に進むにつれて、表情に占める笑みの割合が小さくなり、最後には眉を曇らせていた。

「あなたがロイデン王への使者に選ばれたの？父さんはそれを認めたの？あなたはまだ十六にはなっていないのよ」

テムナの声には、もしかすると息子が自分を担ごうとしているのではないかしら、という疑いが含まれていた。悪戯盛りの息子には、多少の警戒が必要だ。

「父さんも認めてくれたよ。でも、母さんの許可が有ればって。ねえ、僕、まだ十六にはなっていないけど、ほんの数カ月早いだけなんだ。お願い。僕がやってもいいでしょ？」

テムナはお茶を飲んで、ため息をカップの中に注いだ。許さない訳ではない。ただ、もう息子がそんな年になったのかと寂しさを覚えただけである。

「ねえ、知ってる？」

デイーゴはカップ越しに、食卓の上に身を乗り出した。

「お父さんも昔十六歳になる前に雲乗りの仕事に就いたんだって。

それもお父さんの方が、僕より足りない月数が多かったんだ」

まだ誰も知らない秘密を得意げに友達に教えてあげる時のように、両手を広げて父の秘密を告げた。デイーゴの満面の笑みは、テムナの冴えない表情とは一緒に踊ることができず、小さくなり、やがて消えた。

「・・・駄目なの？母さん」

デイーゴは恐る恐る聞いてみた。完成間近だった砂の宮殿が、突然のにか雨で崩された時のような気持ちになった。

「ごめんなさい、駄目じゃないのよ。あなたはジュードの息子ですもの、一日も早く大空を彼方まで飛んで行きたいという気持ちになるのは、自然なことだわ」

「それじゃ？」

「もちろん、許可するわ。パルモ爺様もジュードも認め、何よりあなた自身がそれを望むのであれば、母さんに異存はない」

デイーゴは、小躍りどころか大躍りして喜びたかったが、止めた。頭をぶつけられるのではないかと危惧していた天井は、ひとまず安

堵の息を吐いた。

「でも、どうしてそんな悲しそうな顔をしているの？母さんが嫌なら、僕、諦めるけど」

父親から、自分で責任を取れるならどんな大人になっても良い、だが母親を悲しませることだけはするなと言いつき聞かされてきたディゴにとって、母の悲しみは彼の決断を左右する。

「まさか悲しいなんて。むしろ嬉しいわ」

テムナは慌てて表情の多くを占めていた曇りを振り払った。そして、息を長く細く吐いて、

「不思議ね。あなたが生まれたばかりの頃は、一日も早いあなたの成長を望んでいたのに、いざこうしてその日を迎えて見ると、胸が細い糸で縛られたような思いがするの。雄々しく旅立って欲しいのに、ずっとそばに居て欲しい。ふふ、親って我が儘なものね」

あなたにも子供ができれば、この気持ち分かってくれるかしら、とテムナは言った。

「さあ、長老様の御屋敷へお急ぎなさい。旅の支度はしておくわ。あなたが汚した廊下の掃除もね」

母は、いつもの優しい笑顔に戻った。

「ありがとう。母さん、僕、頑張るよ。見ててね」

「あなたはジュードと私の子。何も心配してはいないわ。でも気をつけてね」

テムナはそつと手を伸ばし、机の上の息子の手に重ねて、撫でた。

「さ、もうお行きなさい。長老様を待たせてはいけないわ」

「うん」

素直に頷く息子の顔はまだあどけないが、この旅を終えて帰って来た時には、きっと大人びていることだろう。テムナにはそれが楽しみでもあり、寂しくもあった。

息子を見送ったテムナは、二人分のカップを片付けてから、荷造りを始めた。

ルドニツク王国へまでは、飛び雲で二日の距離である。一人前に

なりきつていないデイーゴでも三日の距離だ。雲乗りの使者は宴で歓迎されるのが慣例であることから二日程度滞在するとしても、八日余りの旅である。それほど長期の旅行ではないが、デイーゴにとっては、これが長い人生の旅の始まりなのである。それを思えば、テムナは胸の中の喪失感を拭い去ろうとはしても、どうしてもそれを果たすことができなかった。

テムナが荷物の最後に入れた小さな包みには、手製の木彫りのお守りが包まれていた。雲乗りが最初の仕事に就く時、その旅路には母親の作ったお守りを持って行くのが習しであった。十六歳の誕生日に渡すつもりであったが、なぜか気が急いで、ほんの数日前には仕上げてしまっていた。今から思えば、あの気の逸りは、今日あることの予兆を母の本能で感受したからかもしれない。

「あなたの旅路に、常に幸福の草花が咲き盛り、正しい道へのしるべとなりますように。大いなる神の祝福が共にありますように」

テムナはそう祈ってから、荷造りを終えた。きちんと畳まれた着替えには母の愛と一緒に畳まれており、整然としまわれた旅道具の側には、母の祈りが一緒に並んでいた。

そんな母の暖かい愛情が旅路を守ってくれていることを知っているからだろうか、デイーゴの胸の中には、不安はどこを探しても見つからない。足取りは弾むようで、前方を真っすぐ見つめる瞳には、ルドニツクの王城で盛大な歓迎を受ける遠くない未来の自身の勇姿が、既に映っていた。

「長老様の御屋敷では、粗相しちゃいけない。おとなしくしているんだよ」

主人というよりも、弟に対する兄のような調子で、パルノードに注意するデイーゴであった。応えるパルノードの表情は少々ふてくされている。

「いつも粗相して怒られてるのは僕だったかい？」

これまでの失態の犯人を押しつけられちゃ堪らないとばかりに、パルノードはふわふわの銀白の毛を、若干逆立てた。だが、従者の

抗議は、宙を掻くような足取りの主人には届かなかった。

やがて長老の屋敷が見えてきた。

長老であるオンベ老の屋敷は、円形に軒が並ぶ村の中心地の、またその中心にあった。木造二階建ての居住用の屋敷は特別立派なものではなかったが、甍を並べる儀式用の舞台を備えた建物はなかなかに荘厳で、吹き行く風もその前では一礼をして行くかと思われた。長老屋敷の前には、既に何人かの村人が、神と長老の祝福を受ける少年を待っていた。パルモ爺さんが村中に連絡を回してくれたのだらう。

いずれも見知った顔ばかりで、この少年の前途に幸多かれと、にこやかな笑顔を向けてくれている。いずれ、父ジュード、母テムナを始め、仕事に出ている雲乗りを除いた村人の大半が集まってくるだらう。村人が信奉する風の神ユースに、僕となる新たな少年を紹介することは、彼らにとつても誇らしいことであつた。

ディーゴは彼らの祝福の前を、嬉しいような、誇らしいような、気恥ずかしいような面もちで、足早に歩いた。

長老邸の門をくぐり、扉を開けると、燦々と陽が射し込む玄関に、長老オンベが待っていた。

白い綿菓子のような眉を乗せた目の瞳は鏡のように正邪を映し出しそう、ディーゴは一瞬緊張したが、次の瞬間のオンベ老の朗らかな笑顔に、ディーゴの心臓を縛りかけた緊張の糸は、ふっと解かれた。

オンベ老は屋敷内の一室にディーゴを誘った。そこは何と云うこともない小さな部屋で、正面高くに据えられた窓から一筋の陽光が差している他は、何も無い。儀式の前にここで精神を統一させておきなさい、と言いついて、オンベ老は部屋の戸を閉めた。部屋は薄暗くなり、一筋の陽光の周囲は、ぼんやりとした陽の粉で覆われているように見えた。

精神の統一を図れと命じられても、少年の心は何かと騒がしいもので、何をどうすればよいのか見当がつかなかった。しかし、とり

あえずも床に座ってあれこれ考えているうちに時間が経ったのだろう、部屋の戸は再び開かれ、老女性の細面が覗いた。長老オンベの長年の伴侶であり、村の最も憤み深い女性として女達の尊敬を集めているテテナ婆様である。テテナ婆様の瓜型の顔には数多くの皺が刻まれているが、往年は、鶯も盛りの梅の花と見紛うほどに美しくつたに違いない。

「ディーゴや、いらっしやい」

と、テテナ婆様は手招きした。ディーゴが部屋の戸口まで行くとテテナ婆様はディーゴの襟元のボタンを一つ外し、そのボタン穴にクールスノーと呼ばれる純白の花弁を持つ花を一本、差ししてくれた。花は甘い香りで、ディーゴの鼻を弄ぶ。クールスノーはカルパースの万年雪に包み守られるようにして咲く花で、ノークラットの村人から盲目の神と信じられている風の神が愛する花である。

「いい香りだね」

ディーゴが見上げると、テテナ婆様は切れ長の目に瞼を伏せて、口元でそつと笑った。多くを語らない女性だが、その優しさは滴るように伝わってくる。

「ではいきましよう」

テテナ婆様は、ディーゴの手を引いて部屋を出た。屋敷内の廊下をテテナ婆様の後ろに付いて歩きながら、ディーゴは母テムナが皺くちや婆さんになるのは嫌だったが、テテナ婆様のようになるのなら許せる、などと不埒なことを考えた。

扉を一つ開けると、祭壇へ向かう渡り廊下だ。廊下とはいえ、日差しを避ける天井があるだけで、左右から風が吹き渡ると、クールスノーの香りが益々と立った。その香りにつつとりとしている間に廊下を渡り終えると、そこにある扉の前で、テテナ婆様は歩みを止めた。ディーゴを振り向いて、

「さあ、ここからはあなた一人でお行きなさい」

と言った。

命じられるままに扉の取っ手を握ると、一つ呼吸を置いてから、

デイーゴは扉を開いた。扉の奥はまるで劇場の舞台裏のような雰囲気、長い階段が一つ、神妙な面持ちでデイーゴを待っていた。

さすがに、緊張感が喉から青い顔を覗かせそうになってきた。ほとんど心の太鼓を叩きながら、長い階段の一段目に足を掛け、見上げれば、ずっと先の頂には暖かげな外の光が漏れている。

階段は、ことさら長く感じた。数段目からは、一段昇る毎に人のざわめく声が強くなってきた。多くの村人達が、デイーゴの登壇を待ちかねているのだろう。

階段の頂には小さな空間が設けてあって、正面に扉がある。扉の隙間からは外光が漏れ込んでおり、人のざわめきの一つ一つの声が認識できる。扉は黒檀で、風の神ユースの紋章が刻まれていた。そこに、一文が浮き彫りにされている。

「汝、真にユースの忠実な僕たらんと欲する者か」

浮き彫り文は、デイーゴにそう問いかけてきた。

(ユース様の忠実な僕たらんと欲する者)

デイーゴは心の中で反復した。

生憎と、デイーゴは風の神に出会ったことはない。彼は村人を愛し、村人を通してノークラット村を愛している。その村が風の神ユースを信じ、敬っている以上、デイーゴもまた自然とユースを信じ、敬っている。村と村人のために尽力することが風の神への無私の奉公となるのであれば、忠実なる僕たらんことは望むべきところである。

勿論だよ、とデイーゴが小さく口にすると、風が背後から吹き来たり、黒檀の扉を押し開いた。眩しいばかりの陽光と、万雷の拍手が彼を待っていた。

デイーゴは、高い壇上にいた。壇下には、村人達が祝福の笑顔を並べている。空は青く、降りしきる陽光は惜しみない。

「デイーゴよ、こちらへ」

長老オンベは、風の神の象徴色である青の衣を身に纏って、両手を開いてデイーゴを招いた。オンベ老の足下前方には、風の神ユース

スの紋章が刻まれており、デイーゴはその上に跪くよう命じられた。開いた両手をそのまま頭上に掲げて、

「聖断と宣誓の門をくぐりし汝の、照覧の儀を執り行つ」

と、長老オンベは宣言した。壇下の村人達は、水を打たれたように静まった。

音吐朗々たる長老オンベの祝詞が、風の神を招来する使徒となつて空の高みに昇っていく。

「乞い奉る。新たなる僕たらんと欲する者を御照覧あれ」

長老オンベは、デイーゴに立つことを命じた。

「汝、真にユースの忠実な僕たらんと欲する者か」

黒檀の扉に浮き彫りにされていた同じ言葉で、長老オンベは再び問うた。

「はい」

小さく、しかし強くデイーゴが頷くと、長老オンベは大きく両手を開き、青い空を仰いだ。

「誓詞はかくの如し。雄渾なる叡慮をもって、万里へ届く滴りし恵みをこの新たなる僕に垂れ賜うならば、その徴を与え給え」

長老オンベの声響が青い空に吸い込まれると、何とも不思議な現象が起こった。小さな旋風が起こってデイーゴを包み込んだかと思うと、襟元に差されたクールスノーの七枚の純白の花びらを散らし、舞い上げて、周囲に妙なる甘香を漂わせつつ、空のいずこかへ持ち去った。

「盲目の神ユースは、汝の捧げし聖花をお受け下さった。祝福がもたらされたのだ。汝の行くところ、ユースの恩恵が滴ろう」

襟元を見よ、そしてユースの最初の恩恵を手にするが良い、と長老オンベは言った。

デイーゴが襟元に手をやってみると、花びらを持ち去られ、花柱のみが残されたクールスノーの一茎が残っていた。しかしそれは、もはや単なる花の名残ではなかった。ユースの恩恵が加工を施したのか、柔らかな茎は鋼の強さを有しながら先端へ行くほどに鋭利と

なり、花柱を柄と見れば、ちょうど小さな剣のようであった。

「息吹の掌剣じゃ。教わったことがあるう」

長老オンベは、ディーゴに記憶の糸を手繰らせるような言い方をした。確かに習ったことがある。ノークラット村に伝わる数々の雲乗りの秘法は、この息吹の掌剣を媒体にすることによって、雄渾なる風の神の叡慮を現に顕わすものであることを。そして、いくつかの初歩の法は、既に学んである。

「この筐にしまつて、常に肌身に添えておれ」

ディーゴは、長老オンベから授かった白檀の筐に、息吹の掌剣を納めた。

これで、照覧の儀は終わる。

続けて、断煩の儀が執り行われた。雲乗りの少年が、これまで生活してきた過程で身に纏つてしまつたしがらみや煩惱を、断ち切る儀式である。

長老オンベは、背後に飾つてあつた一振りの剣を手に取ると、恭しく額の高さに奉つた。はらりと鞘を払うや、ひやりとした冷気が周囲を払つたかと錯覚するほどに、その剣は鋭利に研ぎ澄まされていた。

長老オンベは、剣を頭上に掲げるや、ディーゴの前後左右、そして頭上の空間を、颯々と払つた。そして剣を鞘に収めると、その一振をディーゴに差し出した。

「受け取るがよい」

長老オンベの命ずるがままにその剣を手にすると、ずっしりとした重みが両腕に伝わつた。捧げ持つだけで両肩が痺れそうで、到底鞘を払つて剣を使うことはできそうもない。

「雲乗りの剣じゃ、ディーゴよ」

厳かに長老オンベは言つた。

「本来授けるべき剣は、お主の次の誕生日に合わせて鍛えさせておるゆえ、生憎と、今この場はない。今授けた剣はわしのものだ。仮の授剣ではあるが、まあ、この度の仕事内容であれば、よもや剣を

用いることはあるまい」

雲乗りの剣は、カルパース山腹の鉞脈から採取される鉄を鍛えて作られる。新たなる雲の導士の誕生に合わせて、一年を掛けて鍛えに鍛え抜かれる業物である。

カルパースの雪解け水と秘文の刻まれた槌で鍛えられる雲乗りの剣は、その鋭利なこと比類もない。現のものを斬るのにもこれ以上のものは稀であろうが、雲乗りの剣は、精霊など現に実態を持たないものが、現に影響を与えるその縁を断ち切ることを目的としている。暴れ雲などを発生させる天霊や不属霊が雲乗りの鎮静の秘法に従わず、周囲の村々に重大な被害を与えることが避けられなくなった時に、雲乗りはこの剣の鞘を払うのだ。

「立つがよい、新たなる導士ディーゴよ」

儀式を終えたからだろうか、ディーゴの姿は、ほんの少し前の彼とは違って見えた。風の神ユースの恩恵は、少年を大人にも変えるのだろうか。

「儀式は滞りなく終えた」

長老オンベの厳かな口調はそこで終わり、穏やかで優しい老人の口調に戻った。

「ディーゴよ。そなたに授けた雲乗りの剣が仮のものであるように、そなたはまだ仮の導士じゃ。じゃが、この村を導士として旅立つ以上、そなたには正規の導士としての責任が付きまとう。そなたの行動の一つ一つにノークラットの、雲乗りの、風の神ユースの名誉がかかるのじゃ。そのこと肝に銘じ、ゆめゆめ忘れてはならぬぞ」

長老オンベの最後の説教に力強く答えたその瞬間に、ディーゴがずっと夢見て来た旅立ちの刻が訪れるのだ。

「はい。長老様」

ディーゴの瞳はまっすぐに長老オンベに向けられ、彼の決意は十分に長老オンベに伝わった。長老オンベは大きく頷いた。

「皆の者よ」

長老オンベは階下を集った村人たちに呼びかけた。

「新しき雲の導士が誕生した。ユースの祝福を受けた以上、門出に恐れるものは何もないが、皆の祝福をも加わらば、旅の行く手の安全はさらに犯し難きものとなるう。さあ、皆の者、新しき導士に祝福を」

その言葉の余韻に、万雷の拍手が重なった。集まった何十人もの村人たちのうち、真にディーゴの旅路を祝わぬ者など一人として存在しなかった。ディーゴと同年代の友達も、一歩先に行く仲間への羨望の念を完全には押さえ切れないながら、それでも精一杯の声援を送ってくれていた。

鳴り止まぬ拍手の中で、長老オンベはディーゴの父母を壇上に招いた。父ジュードはノークラット随一の雲乗りの誉れを毅然とした態度に表して、母テムナは聖母も範を仰ぐかのような控えめでしとやかな拳措で壇上上がった。

両親の胸にはどれだけの感慨が込み上げているだろうか。子供を生み、育てるといふのは並大抵の努力ではない。その努力が、今こうして実を結んだのだ。これほどの誇りの時は、そうそうあるまい。ノークラット村の掟にある十六歳の誕生日には少し早い、その程度の差など、この祝福の前には全く意味のないことであつた。

母テムナは準備してきた荷物を息子に背負わせた。父ジュードは、息子の頭に掌を乗せ、髪をくちやくちやしながら笑つた。

ディーゴの瞳に映る村の景色は、もう昨日までと同じではない。守られてきた者から、守る者への変化が、村の色彩を微妙に変えた。「パルノード！」

ディーゴの澄んだ声が青空に放たれた。その声に応えた銀白の飛び雲が、虚空を滑って主を迎えに降りてくる。壇上を二三歩駆けて、その足が壇の縁を越えようとした時、飛び上がったディーゴの体は、見事、パルノードの背に迎えられた。澆刺とした若い四肢が躍動する姿は惜しめない陽の光を受けて、虚空に弧を描いた時、まるで虹を引いたかのように、集った村人たちの目に眩しかった。

壇上に、パルモ爺さんが太った体を登らせた。手には、黒い鞆が

下げられている。乱れた息を整えて、

「では、ディーゴよ。間違いなく長老の親書をロイデン王に手渡すのじゃぞ。誰の手も通わず、お主が渡すのじゃ。よいな」

パルモ爺さんは、長老の親書の入った鞆をディーゴに手渡した。

パルノードの背で鞆を受け取ったディーゴは、

「任せて」

と言った。

「ディーゴよ。初めての仕事は戸惑うこともあるだろうが、そんな時は父を思い出せ。立派に果たせよ」

ジユードの激励の言葉に、母テムナが笑顔を沿えた。

「分かった。大丈夫だよ。僕だって父さんと母さんの子供だ」

ディーゴはそう言ってから照れ臭そうに、鼻の下を人差し指でこすった。

空が待っている。高らかに舞い上がる雲乗りの子を。

「行って来ます」

父母に、長老オンベに、パルモ爺さんに、そして見送ってくれる全ての村人たちに告げる出発の宣言はとびきりに弾んで、屈託もない。

「よし、出発だ！」

ディーゴが言葉の鞭をくると、パルノードは勢いよく大空を駆け上がった。疾風を狩る者パルノードは、その名の由来を誇示するかのようにまっしぐらに飛び立ち、あつと言う間もなく青空に消えて、一筋残された筋雲が、ゆっくりと虚空に解けた。

見送った人々はしばらく空を見上げ、やがて周囲の人々と笑い合いながら壇下の広場を去って行ったが、父ジユードと母テムナだけは、いつまでも青空を見上げていた。

<序章と第1話はここまでです。続きは書店にて!!>

(後書き)

興味を持たれた方は、是非ご購入ください。

お父さんやお母さんを想いながら、子どもを想いながら、大好きな人を想いながら、この星に生きる命を想いながら、読んでいただけたら幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7337i/>

雲乗りのディーゴ～グランネリア物語～

2010年10月8日15時26分発行